

2020年5月24日 大井バプテスト教会 礼拝説教  
説教題「約束の聖霊」使徒言行録1章3～5節、9～11節

主任牧師 加藤 誠

**「エルサレムから離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によるバプテスマを授けられるからである」(使徒言行録1章5節)**

イエス・キリストの生涯を伝える四つの福音書の「結び」の部分は四者四様で、必ずしも一致してはいません。主イエスが十字架で処刑された後、墓に葬られ、復活されたことまでは報告されていますが、その後、復活したイエスがどうなったのか、十字架でバラバラになった弟子たちがどうやって「教会」を建てるに至ったのかについて福音書では明確なところは分かりません。唯一、その後の弟子たちの物語を伝えているのが、ルカの書いた「使徒言行録」です。

「使徒言行録」によると、主イエスは復活された後、四十日にわたって弟子たちに現れ、その後、天にあげられた…と報告されています。弟子たちは復活したイエスによって力づけられ、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか？」と尋ねています。このときの弟子たちの意気込み、高揚した思いが伝わってきます。「復活したイエスが一緒に居てくださるなら、百人力。ユダヤ教の指導者たちも、ヘロデ王も、ローマの兵士たちも、もう怖くはない!」。そう思ったことでしょうか。しかし、その肝心のイエスが天に上げられてしまうという予想外のことが起こります。そのため弟子たちは、主イエスが天に上げられていくのをただ呆然と見上げ、見送るほかなかったのです。

主イエスが一緒に居てくださらないなら、たちまち腰砕けになってしまうような、弱虫で、情けない弟子たちが、その後、いったいどのように「イエスの出来事の証人」として立つことができたのでしょうか。

一つ目には、弟子たちは主イエスから四十日にわたって、神の国の話をあらためて聞いたこと(使徒1・3)が伏線になっているように思います。主イエスの話は何度も何度も聞いてきたはずですが、けれども「主イエスは十字架で殺され、復活された」という視点から、もう一度、神の国の話を聞き直す必要があったのです。

たとえば「貧しい人びとは、幸いである。神の国はあなたがたのものである」、「今、飢えている人びと、今、泣いている人びとは幸いである」という主イエスの言葉があります(ルカ6章)。なぜ、「貧しい人、飢えている人、泣いている人がさいわい」なのか。その言葉を聞いた時には、弟子たちはチンプンカンプンだったことでしょう。その言葉に込められた真の意味は「十字架と復活の視点」からでないとしてわからないからです。十字架において、人間のどうしようもないどす黒い罪と、この世の苦難のすべてをその身に引き受けてくださったイエス。その十字架の暗闇を打ち破って復活の命の希望を見せてくださったイエス。その主イエスが「神の国はあなたがたのものだ!あなたがたは笑うようになり、満たされるようになる!」と

宣言すると同時に、一人ひとりと共に歩んでくださっているから、「貧しく、腹を空かせ、涙している人たちはさいわい」なのです。十字架と復活のイエスという視点からすべてを見ていく。この信仰を弟子たちは学ばされたのでした。

二つ目に、弟子たちは「ただ上からの力、神からの聖霊が注がれる」のを祈って待つ者とされたということです。十字架の場面では、散り散りバラバラに逃げて姿を消してしまった情けない弟子たちを立ち上がらせたのは、彼ら自身の勇気でも賢さでもありませんでした。彼ら自身のほんとうの姿というものは、イエスが天にあげられるのをただ呆然と見ているほかない、イエスがいなければ何もできない小さな者たちにすぎません。イエスから目をそらしたら、たちまち恐れが生じ、湖の水の中に沈んでしまう、「信仰薄き者よ、なぜ疑ったのか！」と叱られる者にすぎません。しかし、その小さな者たちが「ただ上からの力、神からの聖霊の力」により頼み、祈る者とされていったとき、小さく貧しい器にすぎない弟子たちが「イエス・キリストの出来事の証人」として建てられていったのです。

先週も紹介したマルチン・ルターという宗教改革期を生きた人がいます。ルターは「恩寵のみ」の信仰を生きました。「恩寵」とは「十字架に示された神の永遠の愛。神の測り知れない慈しみ、憐れみ」を言います。「信仰とは私たちの頑張りではなく、神の恩寵を感謝して受けていくこと」。この信仰をルターは生きたのでした。

そのルターの言葉で有名なものに「わたしは神の乞食だ」という臨終の言葉があります。ルターは63歳の時、旅の途中で客死しました。最期を看取る家族や知人のいない、寂しくあつけない死だったと言いますが、テーブルの上の紙片に「わたしは神の乞食だ」という言葉が残されていたそうです。「わたしは、神の慈しみと憐れみに依り頼み、生きるほかない貧しい者」という意味でしょう。この言葉だけだと、何だか寂しい響きもします。けれどルターは同時に「たとえ明日世界の終わりが来ても、わたしは今日リンゴの木を植える」という言葉も残しています。この言葉には、どんな時にも、どんな状況においても、天を見上げながら、今日、自分にできることを、使命として与えられたことに希望をもって取り組む生き方が示されています。神の豊かな慈しみと憐れみに依り頼む「明るさ」があります。

弟子たちもまた「神の乞食」としての自分たちの貧しさを自覚せずにはいられません。イエスなしには一歩も立ちえない、進めない、貧しい者たちだったのです。しかし、その彼らが、すべての物事を主イエスの十字架と復活から見ていく信仰に立ち、ただ上から注がれる力、神の聖霊の力を待ち望み祈る者とされた時、彼らは「キリストの出来事の証人」として、この地にあって「教会」として建てられていったのでした。

**「エルサレムから離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい」、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(使徒1章5節、8節)**

来週31日はペンテコステ、教会の誕生日です。このイエス・キリストの約束を待ち望み、祈る者とされたいのです。